

『教学之源流』を 読むにあたって

ことば

学祖荒木俊馬先生は、一九世紀の末熊本県で生まれた。今からおよそ七〇年前の京都大学助教教授のとき、一年半にわたってドイツに留学。アインシュタイン博士から直接に教えを受けた。相対性理論と量子力学について、当時の最新の学問を学んで帰国。その後の世界の物理学、天文学の発展につとめるとともに、教えるから湯川秀樹博士、朝永振一郎博士というノーベル賞学者を育てた、世界的な宇宙物理学者である。

お話の中に現在の学生諸君には、馴染み

の薄いことばや、ことは違いが少なくない。この欄では、いくつかのことばについて、注釈『広辞苑』『英和辞典』『岩波書店』からおまに引用を付けている。

時代背景

昭和四〇年（一九六五）から昭和四五年（一九七〇）までのお話である。先生の話の背景を知ってもらいたいので、それぞれの年の「社会や出来事」を記した。

解説

京都産業大学の建学の理念にかかわる出来事やエピソードを追加した。

資料

学祖の略歴と主な著書、論文を掲げた。膨大な講演の草稿、オペラや戯曲の台本などは省略した。

『教学之源流』の時代背景

この冊子に収められた荒木俊馬先生の告辞、挨拶、祝辞は、昭和四〇年（一九六五）の開学から第二回卒業式の昭和四五年（一九七〇）までの五年間に語られた。本学の開学は、六〇年安保と、七〇年安保という戦後最大の大量運動の中間点にあたり、収録された告辞等は一つの安保闘争の間に、すっぴりとおさまっている。建学の動機としては先生が挙げた「このままではわが国は滅びる」という危機意識は、ふたつの安保闘争に関わっていたことはいままでもない。

第二次世界大戦の終結のあと、わが国の経済は安保闘争やドルショックなどを乗り越えて、全体としては右肩上がりの急成長を続けた。高度経済成長といわれるこの期間は、昭和三〇年（一九五五）に始まり昭和四八年（一九七三）までとずるの一般的なである。急速な経済大国といわれるまじになったわが国のため、道を振り返ってみれば、その間に日本社会は、それまでに体験したことのないまでの「大きな変容」を遂げたことがわかる。

つまり政治的にみれば、「あんなのはなま。経済的にいえば、「高度経済成長期」に位置する。それが、「この冊子の時代であった。

開学からしばらくすると、もの豊かな時代がやってきた。消費がふえた。カー、カラーテレビ、クーラーが家庭に行き渡るようになった。石油コンビナート建設に象徴されるように、生産設備が増えた。経済優先の風潮が勢いづいた。

半面で、自然が消えて行った。国民の健康を蝕む公害の多発。教育の現場でみれば、高校へ、大学・短大への進学率が著しく伸び、高等教育に対する意識は急速に変わった。経済成長によって、敗戦の痛手から立ち直り、豊かな生活を多くの人が手にすることができた。その代わりに、緑と砂浜の自然、あるいは道義心か思いやりの心といった、かけがいのない大切なものを失ったという指摘がされるようになった。「われらが」「大きな変容」の具体例である。

本学を取り巻く環境もまた、激変した。

安保闘争と大学紛争

荒木俊馬先生が京都産業大学報に後年、大学創設を振り返って『相次ぐ大学騒動、これでは日本将来の運命はどうなるか。次の世代の日本を担って立つ憂国の青年指導者を育成する大学を創立』せねばならないと考えたと記している。東西冷戦が、険しさを増すなかで昭和三五年（一九六〇）に新たに結ばれることになった安保条約「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」は、国民の間を二つに裂いた。戦争放棄・戦力不保持を掲げる平和路線の考えと、自衛力を充実し、治安立法を強化しようとする考えであった。革新勢力が安保反対を唱えるなかで、保守勢力が推進と言い、岸信介を総裁とする自由民主党が国会で強行採決した。「日本を戦争に巻き込む条約」として、国会の外では反対派の学生や労働者のデモが行われ、規制しようとする警官隊との間で衝突が相次いだ。

条約の更改（国定期間一〇年間）期にあたった昭和四五年（一九七〇）、再び安保反対の大衆運動が行われた。

保守も革新も、ともにわが国の現状を憂え、国の未来に不安を抱いたことはたしかである。

七〇年安保は、大学紛争と重なって激化した。発端は東京大学医学部で昭和四三年（一九六八）春の研修医制反対のストであった。学生自治会と、青年医師連合会のストに対して大学が、無関係の医師まで処分したことが明らかになって全学に拡大。学生側は安田講堂を占拠、立てこもった。ほぼ同時期に日本大学では不正経理問題がきっかけで紛争に入るなど、全国の大学の八割までがバリケード封鎖による大学占拠という事態になった。背景として、学齢人口の急増と、それに伴う進学率の急上昇という、大学の変容があり、そこに蓄積された学生の不安や不満に対応する能力に大学側が欠けていたからだ。説明されている。フランスやアメリカなどの先進資本主義国でも、大学闘争が激化した。公書問題や、ベトナム戦争反対がその理由に挙げられた。

これらの学生運動は既存の社会党、共産党から離れた新左翼と呼ばれる集団が核になった。世界同時革命をスロガンにした赤軍派などが過激な闘争を展開した。安田

城事件というのは、昭和四四年（一九六九）一月、安田講堂に立てこもり火炎瓶で抵抗する過激派学生らに対して、機動隊がヘリコプター三機に放水車を使い、催涙ガス弾を撃ち込んで封鎖を解除した出来事を指す。東京大学は、この年春の入学試験を中止。しかし、過激な学生運動に対して、一般学生の拒絶反応がおこって、大学紛争は発端から一年あまりで沈静化して行った。

こうした高等教育のマスプロ化に対する不満が、紛争といつかたちになって顕在化したとされている。

このころわが国の高等教育の現場は、戦後の第一次ベビーブームの波が押し寄せたことによる、深刻な悩みを抱えていた。一八歳人口は昭和四一年（一九六六）の二四九万人を頂点に二〇〇万人弱で推移、その一方で高度経済成長で人材に対する企業の需要が伸び、さらには進学を支える家計にゆとりができたこともあって、進学率が急伸。昭和三五年（一九六〇）一〇・三%から昭和五〇年（一九七五）三八・四%に膨れ上がった。この間に大学・短大の入学者は二万人から六〇万人へ三倍増、受け入れの大部分を引き受けた私立大学は一四〇校から三〇五校へ、私立短大は二二四校から四二四校へ増えたのであった。

第一回入学式告辞

参考「一」

告辞 告げさう言葉

所信 信じている事柄

一触即発 危機に直面していること

総合大学 数個の学部その他の研究、教育組織で構成された総合的機構をもつ大学。なお単科大学は、単一の学部を置く大学である。

憂国 国家のことを憂えること

至情 まじこと

民族 文化の伝統を共有することによって、歴史的に形成され、同属意識をもつひとびとの集団。言語を共有することが重要視される。

基本的人権 人間が生まれながらに持つ権利。

産学協同 教育において産業界と学校とが協同すること。技術者養成や産業界からの委託研究など。

開放経済 外国との経済取引が自由にできる国家経

済体制

自由貿易 国家が外国貿易に制限を加えず、保護奨励も行わないこと

インテリ intelligentia もとはロマン語で、知識層

象牙の塔 現実社会と没交渉な研究生生活。大学を指す。

双肩 責任や任務を負うものたこえ。「双肩に担う」は、責任を負うこと

大学の自治 大学が、政治上、宗教上、その他の権力または勢力の干渉を受けることなく、全構成員の意思で、研究と教育の自由を行使すること。

法治国家 国民の意思によって制定された法に基づいて国家権力を行使することを建前とする国家。

治外法権 外国の領地内において、その国の法律、とくに裁判権の支配を受けない特権

全学連 全日本学生自治会総連合の略称。大学の学生自治会の全国的連合機関。一九四八年に結成

オルグ organizer 未組織の労働者や農民など大衆の間に入って、組合や政党を組織するひと。オルグ。

先覚者 他人より先に道理をさとり、世を導くひと。

参考「二」

学祖 荒木俊馬先生が第一回入学式において述べた『大学要覽』に要約しておいた本学の建学精神と教育方針のうち、教育方針を次に掲げておく。

『65 66 大学要覽』から要約) 本学は、何よりもまず「精神的にゆたかな人間」を育てることを念願している。そのために、日本の歴史に流れる平和な創造的伝統に学びつつ、ゆたかな国際的文化を吸収するように導きたい。本学は外国語教育に力を入れ、英語のほかドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語、中国語の講座を開講している。それによって、国際的教養を身につけて、将来は国際社会で活躍できる人物を養成する目的からである。「建設的な人間」の養成もまた、本学の願いである。わが国ではいま、批判に名をかりて、いたずらに破壊的な言動が横行している。しかし、真の批判的精神は根底において建設的でなければならぬ。建設的精神のないところには、真の批判は成り立たない。「この建設的精神こそが、積極的で誠実な、そして責任感のある生活態度を培う。そこに形

成された人格は、現実に対する客観的で科学的な認識を持つに至るであろう。本学が、専門の学部において高度な科学的研究を進め、これに基づいた専門教育を整えているのはこのためである。産学協同という本学の教育方針は、建設的精神と学問的精神の協同という教育精神を根底にして、今日の技術革新時代の要請に応じてこれを具体化したものにほかならない。「祖国の建設に直接、間接に参加する立派な日本人」がいま強くもとめられている。平和を願望し、祖国を愛し、精神的にゆたかであつて、しかも建設的な生活態度をもつ、合理的科学的精神を身につけた人材である。本学の教育上の根本的な精神は、そうした人材の養成にある。この使命は重大であり、前途に幾多の困難もある。われわれは、いつも謙虚な反省を忘れずに、この使命の達成に精進しなければならぬと考えている。

参考「三」

学祖 荒木俊馬先生が自ら理想とする大学づくりを目指

なわる理にきわめいたること。陽明学では、「物をただす」。心の良知を発揮することによって事柄のあり方をただすこと。」

格物致知 学問修養法のひとつ。格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下の八条目。

天地人 天と地と人と。つまり宇宙の万物。

万有 万物・宇宙間にあるすべてのもの。

道義 人の行つべき正しい道。

人間像 性格、外見、行動などを通じて得られるその人の姿、イメージ。

少壮 若くて元気のさかなうこと。

有為 役に立つこと、才能のあること。

新機軸 在来のものとは異なった新しい企画、工夫。

蒐集 収集と同じ。いろいろな集めること。

ゼミナール Seminar 英・米語で、セミナー、ゼミ。

大学の教育法のひとつ。教員の指導のもとに少数の学生が集まって研究し、発表討論などを行うもの。講習会、セミナーともいう。

実社会 現実の社会、実世間。

電子計算機 トランジスタ、集積回路などを用いた高速自動計算機。

余生 のこりの人生。

幾許も無い どれほどもない。

老骨 歳老いた身。

儒家 孔子に始まる中国古来の政治、道德の学。

斃而後已 死ぬまで努力して、屈しない。

万全 すべてに完全で、少しの落ちかもないこと。

四書 大学、中庸、論語、孟子。五経とともに儒家の要の書。

朱子 南宋のひと。一一三〇—一一〇〇。

参考「二」

大学のことば「格物致知」は、家庭的道德をつつしつて国をおさめ、天下を平らかにすることができるといふ、中国古代の帝王学の大綱であるが、大学の注釈にはいろいろの説がある。「字句の大義に通じて、しかる後に本文を熟読玩味するに越すこととはあるまい」と、宇野哲人(このころ)「東大名哲教授(荒木先

生と同郷の熊本の人)は「注釈「大学」」大正五年

発行。講談社学芸文庫一九八三年刊として再び出版。

一〇七頁の中に記している。

第二回入学式告辞

参考「一」

学則 学校の組織編制、教育課程、管理事項などを定めた規則

万(ばん)遍漏 万は、よろず、すべて。遍漏は、注意が足りなくて漏れること。手抜かりのあらうこと。

古来 昔から今まで。

講釈師 講談を演じる人。

ケンブリッジ Cambridge 英国ロンドン市の北八〇kmの大都市。ケンブリッジ大学は、一二一二—一二三三世紀起源の多くのカレッジから構成され、イギリス

指導階層の最高教育機関として知られる。

オックスフォード Oxford ロンドンの北西、テムズ

川の上流左岸の都市。オックスフォード大学は、

一二世紀起源、イギリス最古の大学。ケンブリッ

ジ大学と共にイギリス指導階層の最高教育機関

バックボーン backbone 背骨、気骨。

スポーツマンシップ sportsmanship 正々堂々と勝

負を争つ、スポーツマンにふさわしい態度。

文武両道 文学(注=学問全般)と武道。

醫隊に接する(目上の人に)直接にお目にかかると。

駅弁 鉄道駅で乗客に売る弁当。注=駅弁大学は、

戦後の新設大学の乱立ぶりをからかった言葉。駅

弁を売っている駅ごとに大学はある、というべら

この意味。

コンプレックス complex 心の中のこころ。注= inferiority complex 劣等感の意味に使われること

が多い。

バッジ Badge 記章

隈無く 行き届かぬところ無く。

ギリシャ Greece バルカン半島の南端と付近の諸島からなる共和国。紀元前九一八世紀にアテナイ、スパルタなど多くの都市国家が成立。前五世紀にそれらが同盟してペルシャ戦争に勝利、アテナイを中心に黄金時代を現出した。首都アテネ。正式国名 Hellenic Republic

サギタリウス Sagittarius 射手座。希望を意味する。宏大無辺な大宇宙を駆けめぐるギリシャ神。本学の学章である。

道統 道を伝えた系統

気宇 気構え、心の広さ。

参考「二」

「本学は人間形成のためのスポーツを奨励する」という点について、昭和四三年に創刊された、本学体育会(運動部)の連合機関誌「紺青(こんじょう)」の創刊号に、荒木先生の祝辞が次のように掲載されている。【祝辞】スポーツを奨励しているのは、スポーツが学習研究と並んで、車の両輪、鳥の両翼の如く、心身鍛練の人間

って、そのスポーツをさらには芸術の境地にまで上揚するといふ気構えをもってもらいたい。部は一つの社会であり、部生活で真面目に努力し、それに徹した学生は世の中に出てから必ず立派に社会の期待に沿えるだけの人間と断言できる。そこに要求されるものは、協調性「和」の精神であり、常に自己反省を怠れない謙虚な気持ちであり、この人間なら安心してまかせられるといふ信頼感を他人に与える誠実さと責任感であり、どのような逆境・不遇にも喜んで耐え抜く忍耐力であり、そして本学の校章にある通り大宇宙に雄飛せんとする宏大無辺の気宇であらうと思ふ(要約)

参考「三」

サギタリウスの学章 荒木俊馬先生のご長子で、馬術のオリンピック日本代表だった荒木雄豪・本学名誉教授によると、デザインは元吉正大氏の制作だといふ。荒木名誉教授の話 平成十五年四月(四日)に八一歳で亡くなられた元吉正大氏は、早稲田大学馬術部の出身でアバロン乗馬学校の会員として馬術界で活躍を

形成に大きな役割を果たすものであるからであって、決して職業スポーツ選手を養成のためではない。英国の名門大学ケンブリッジやオックスフォードのスポーツ選手が同時にまた、学業においても優秀な成績を挙げていることは世界周知の事実であって、これが真のスポーツマンシップといふものである。(要約)

また、その創刊号で体育会顧問の荒木雄豪・助教(荒木先生のご長子。本学名誉教授)は次のように述べている。【挨拶】教育においては智育・徳育・体育のどの一つも欠いてはならない。正課の授業と共に課外活動が非常に重要な意味を持っている。正課の授業で、担当の教員を通して学問的智識を吸収し、学問的態度を身につける。同時に、課外活動において学生同士が互いに切磋琢磨し合って身心・技術の錬磨に努力することが、若い時代における人間形成に大きな役割を果たすであらう。とくに運動部においては、自律的に行われる日々の激しい練習を通して、立派な社会人としての精神的・肉体的向上を目指す。同時に、スポーツの技術における極限を追求しようとする努力によ

れ、昭和三〇年代の前半、私がアバロンによくお邪魔していた頃から半世紀近く、親しくおつき合いをさせて頂いてきた方である。

とくに昭和三五年(一九六〇)の春、ローマ・オリンピックの最終予選を受けるべく武宮校長にお願いして「豊饒」「Neptune」と共にアバロン乗馬学校にご厄介になっていた時代には殆ど毎日、お会いして馬術論をしたり、お宅へお邪魔させていただいたりしたものであった。幸いにして辛うじて予選を通過してローマに行けることに決まった時には、ご夫婦には武宮校長「夫妻と共に非常に喜んで頂くことができました。

その頃の私は数年前から無精髭をそのまま伸ばしていたのであるが、オリンピックへ行くにはそれでは余りにも見苦しかろうといふことで、馬と共にヨーロッパへ出帆する数日前にお宅で馳走になったうえ、ご夫妻に缺で髭の手入れをして頂いたことがあった。これは当時浪人中で「髭の雄豪」などと言われていた私にとって非常に懐かしい思い出である。

和駿会(本学の馬術部のOB会)の会員諸君にとって

は元吉氏とは年代がかなり離れるので、初期のメンバー以外は存じ上げている人は少ないと思うが、京都産業大学としては開学以前から何かとお世話になり、とくに現在大学で用いられている学章の原型は氏が考え下されたものである。

それは、本学として重要な節目であった昭和三九年の二月二十九日、文部省から「京都産業大学設置認可の内示」が出るのを、当時本学の東京事務所のように使わせて貰っていた恒星社厚生閣（注＝出版社。俊馬先生の出版物のほとんどを手がけた）で父（注＝俊馬先生）小野氏（注＝小野良介。開学の頃の財務担当理事で、建学の功労者のひとり）と共に待ちながら、近くに仕事場を持っておられた元吉氏を呼びだして、この新しい大学に馬術部を創る計画などを相談していたところ大学の学章のことが話題になった。そして、天文が専門である父が以前から考えていた、大宇宙を自由奔放に翔け廻る半人半馬のギリシャ神サギリウス（注＝話）の話（注＝話）を聞き、その星座を表徴した学章のデザインを画いて翌年二月九日に送って下さったのである。

当時は、学章のデザイン料などは誰も気がつかずにく氏の好意に甘えたままだったように思うが、氏はそのことを一言も口にする事なく、その後の本学ならびに馬術部の発展を非常に喜んで下さっていたのである。約四〇年の昔、開学以前からの本学に対する元吉氏のご好意をここに紹介させていただき、厚く感謝の気持ちを捧げたく思ふ。

参考「四」

昭和四一年の社会と出来事

二月、全日空機が羽田沖に墜落、一三三人全員死亡の惨事を皮切りに三月、カナダ航空機が羽田空港防潮堤に激突、炎上、六四人死亡。翌日にはBOAC機が富士山付近で空中分解、一二人全員死亡。一月、全日空機が松山空港で墜落、五〇人全員死亡。航空史上最悪の年に。四月、戦後最大の交通スト突入。八月、中国では文化大革命勝利祝賀として天安門広場で紅衛兵一〇〇万人集会開催。

カラーテレビ、カー、クーラーが「新三種の神器」とされた。自動車事故が激増し交通戦争の新語が生まれた。

第三回入学式告辞

参考「一」

洵に まじりに。実しよ。
欣快 喜ばしく気持ちの良しよ。

所定 定めのおんじよ。
乃至 あんいは。

クイズ quiz あてもの。

ヒント hint 正解をみつける助けになる情報。

ハーマンカーン Herman Kahn アメリカの物理学者、戦略研究者、未来学の創始者、カリフォルニア工科大学卒、ハドソン研究所長。一九三二—一九八三。

綿密 くわしく細やかなこと。

周到 よく行き届くこと。

誇大妄想 自分は他人より優れていると信じ、自己

を過大評価する妄想。

兎に角 それはさておき。

契機 きっかけ。

有史 文献的史料が存在すること。

空前絶後 以前にも、将来にもなかつと思われ、

ごく稀なやま。

植民地 海外移住者によって新たに開発された地域。

本国に比べて原料供給地、商品市場、資本輸出地

をなし、政治上も主権をもたない完全な属領。

大東亜戦争 太平洋戦争の日本側の呼称。

太平洋戦争 第二次世界大戦で、太平洋方面での日

本とアメリカ、イギリス、オランダなど連合軍と

の戦争。

大東亜共栄圏 太平洋戦争期に日本が掲げたアジア

政策の標榜、欧米勢力を排除して日本中心による

諸民族の共存共栄をはかろうとした。

列強 強大な国々。

感慨無量 感慨が計り知れないほど深く強いこと。

黎明 物事の始まり。

アフレゲール *après-guerre* フランス語で「戦後」の

意味。第二次世界大戦後の退廃的な傾向の人を指す。戦後派 アフレ。

無上の 最上の。

睥睨 あたりを睨みつけて勢いを示すこと。

気魄 気迫。何者にも屈せず立ち向かう強い精神力。

徹頭徹尾 始めから終りまで。

如実 そのまま。

一目瞭然 ひとめみてよくわかること。

礼節 礼儀と節度。

挙動 立ち居振る舞い。

寸時 わずかな時間。

克苦勉励 はなはだしく苦勞しつゝ、しつめ励むこと。

注 〓 刻苦勉励と書くのが普通。

参考〔一〕

昭和四一年の社会と出来事

公害の被害者が司法に対して救済をもとめる動きが目立った年である。六月、新潟水俣病の患者が昭和電工を相手取る提訴開始。九月、四日市喘息患者が石油コンビナート六社に慰謝料請求の大気汚染初提訴。しかし公害対策基本法成立の背後で、企業の無過失責任の条文が削られるなど公害問題への抵抗が続いた。

四月、美濃部亮吉・東京都知事が社共推薦で誕生、革新知事誕生のきっかけになった。十一月、佐藤首相が訪米へ。全学連の学生と警官隊衝突。

ミニスカート流行。テレビ受信一〇〇〇万突破。

第一回卒業式祝辞

参考〔一〕

律する 一定の規程によつて処置する。

処世 世渡り。

爾来 そのとき以来。

函三日 一、二、三日。

類例 似通つた例。

入植 開拓する土地に入つて生活すること。

フロンティア *frontier* 辺境。 *frontier spirit* 開拓

者精神。

万感 いろいろの感想。

斬新 趣向のきわだつて新しいこと。斬新が普通。

鵬 中国の想像上の大きな鳥。

学窓 学校。学舎。

母校 出身校。

附和雷同 自分に一定の見識がなく、ただ他の説に

むくまなく賛成すること。

参考〔二〕

昭和四三年の社会と出来事

本学の第四回入学式が行われたこの年は、大学紛争が始まった年である。一月、東大医学部学生自治会が、直接的には医師法改正に反対して無期限ストに入り、運動は全学へ広がった。四月、日大で国税庁による調べで使途不明金が指摘され、日大紛争に拡大。学生の蜂起は世界的な現象でもあり、フランスでは学生、労働者がゼネストに入った。

八月、札幌医大で日本初の心臓移植手術が行われた。

一二月、三億円事件発生。

GNP、米国に次いで資本主義国第二位。経済大国に。シンナー遊び激増。

参考「三」

昭和四四年の社会と出来事

第一回卒業式が行われたこの年、大学紛争の激化で東大入試が中止されるに至った。一月、機動隊が東大安田講堂に出動、封鎖解除に対して、火炎瓶をつかって激しく抵抗する学生たちを大量逮捕した。これがいわゆる安田城事件である。五月、東名高速道路全線開通。七月、米国のアポロ航空士が月面に着陸。十一月、佐藤首相訪米。安保堅持、一九七二年の沖縄施政権返還などの共同声明。
この年、全米にベトナム反戦の運動が広がった。

第二回卒業式祝辞

参考「一」

関連「せせせしなごう」

通例「ふじごう」

ナンセンス nonsense 無意味なごう
ゲバルト Gewalt ドイツ語で、威力、暴力。国家権力に対する実力闘争。ゲバ。
シュプレヒコール Sprechchor ドイツ語で、デモなどでスローガンを唱和すること。
安保反対闘争 日米安全保障条約改定反対の闘争。
昭和三四年（一九五九） 昭和三五年（一九六〇） 全国規模で展開された近代日本史上最大の大量運動。昭和三五年五月、六月、国会へ向けて数万人がデモ行進、請願者も一〇〇〇万人に達した。昭和四五年（一九七〇）にも条約の改定をめぐって反対運動が行われた。
開放地区 解放区は、革命勢力の支配が確定した区域
バリケード barricade 市街戦などで相手方の攻撃や進入を防ぐため木材、土のうなど急造した柵
火炎瓶 瓶にガソリンを入れ投げつけて破壊すると、燃え上がる一種の手投げ弾。

ゲリラ guerrilla スペイン語で、遊撃戦を行う小部隊

隊

マルクーゼ Herbert Marcuse アメリカの社会学者

哲学者 一九六〇年代の新左翼運動の理論的指導者

者 一八九八 一九七九

ゲバラ Ernesto Che Guevara ラテンアメリカの革命家。アルゼンチン生まれ。キューバ革命に参加しカストロ政権下で要職を歴任。ボリビアでゲリラの指揮中に捕えられて処刑。一九二八 一九六七。

妄想 根拠の無い主観的な想像や信念。

バルチザン Partisan フランス語で、労働者、農民などで組織された非正規軍。

ニューレフト new left イギリスで旧左翼に対する

失望から、一九五〇年代に起こった左翼の政治運動。

動。同様の運動がフランス、ドイツ、アメリカ、

日本などで起きた。新左翼。

桃源郷 俗世間を離れた別天地。

塵気楼 地上の物体が空中に浮かんでみえたり、遠

方の物体が近くに見えたりする現象。

エコノミックアニマル economic animal 経済を第一義とする動物の意。

マスコミ mass communication 新聞、雑誌、ラジオ、

オ、テレビ、映画などの媒体を通して行われる大

衆への大量の情報伝達。

微塵 極めて細かいこと。

被害妄想 他人から害を加えられると信じる妄想。

パニック panic 恐慌、群衆の混乱。

陣痛 物事の完成直前の苦勞。

文化大革命 一九六六年に始まった中国の政治・思想・文化闘争。毛沢東、林彪らが主導者。直接、大衆を組織して、党、行政機関の実権を劉少奇から奪った。しかし、その極左的傾向が弊害を生み、毛沢東の死後、江青ら四人組が責任者として逮捕され、七七年終了が宣せられた。

毛沢東 Mao Ze-Dong 中国の政治家、思想家。一九

四九年に中華人民共和国建設、国家主席。一八九

三 一九七六。

先駆者 人に先駆けてものごとをなすひと。

驚歎 ひびく感心するじやう。

既成 すでに出来上がっているじやう。

旧体制 旧来の体制。

フランス大革命 一七八九 九九年、フランスで起こったブルジョア革命。封建的な旧制度と絶対王政を倒し人権宣言を公布、ルイ一六世を処刑し共和制成立。のちナポレオン出現。

産業革命 industrial revolution 手工業的な作業場に代わって、機械設備による大工場が成立。それと共に社会構造が根本的に変化。産業革命を経て初めて近代資本主義経済が確立した。一七六〇年代のイギリスに始まり一八三〇年代以降、欧州各国に波及。

墨守 古い習慣や自説を固く守り続けるじやう。

いち(一)かばち(八)か のるかそるか。

先天的 生まれつき。

ルモンド Le Monde 世界、という意味のフランス語。パリで発行されている新聞。

民族国家 一民族だけで構成された国家。

人類愛 人類全体を愛するじやう。

イデオロギー ideology ドイツ語で、思想体系、考え方。

ナショナリズム nationalism 民族国家の統一、独立

発展を推し進めることを強調する思想、運動。

分極化 相対立する立場に分化するじやう。

部族 人種、言語、文化などの特徴を共有し、一定

の地域内に住んで同族意識をもつ集団。

クーデター coup d'etat フランス語で、急激な非合

法手段に訴えて政権を奪うじやう。

EXPO EXPOはexposition(博覧会)。昭和

四五年(一九七〇)には大阪の千里丘陵で開かれ

た。万国博はInternational Exhibition という。

表徴 外面にもみわたるじやう。

範を垂れる 自ら実践して模範を示す。

瀕死 今にも死にぞうなさま。

トインビー博士 Arnold Joseph Toynbee イギリスの歴史家。独自の史観で世界諸文明の興亡の一般

法則を体系つけた。一八八九 一九七五

持論 その人が常に主張している意見。

天地開闢 世界の始め。

鎮座 人や物がどっかりと座を占める様子をからから

ついでにじやう。

大乗的見地 小事に拘泥せず大局のためにことを決

ついでにする視点。

不撓不屈 困難にあってもひるまずくじけないじやう。

自我 意識や行動の主体を指す概念。

無形 かたちの無いじやう。

参考「二」

昭和四五年の社会と出来事

日米安保条約が自動延長された。大阪の千里丘陵で日本万国博開催。国民の関心は経済に向けられ、あるいは公害や交通戦争の激化に対する怒りが強まった年でもあった。

四月、大阪の天六でガス爆発、死者七九人。六月、安保自動延長。七月、東京・杉並区で光化学スモッグ

グにより高校生四〇人余被害。一月、三島由紀夫が自衛隊に押しかけ演説の後、割腹自殺。

荒木俊馬先生略歴

明治二〇年 三月二〇日	熊本県鹿本郡来民町で出生
大正二二年 三月	京都帝国大学理学部宇宙物理学科卒
二三年一〇月	京都帝国大学助教
昭和 四年 一月	ドイツ留学へ渡欧
	理学博士
六年 八月	帰国
一六年 五月	京都帝国大学教授
二〇年 一月	大日本言論報国会理事
九月	京都府上夜久野村に隠棲
二九年 四月	帰洛
一〇月	大谷大学教授
三九年 五月	日本天文学会名誉会員
四〇年 四月	京都産業大学初代学長兼理事長
四四年 二月	同大学初代総長
四九年 九月	京都大学名誉教授
五一年 五月	ポランド最高功労十字勳章受章
五三年 七月二〇日	逝去

荒木俊馬先生の主な著書・学術論文

- 「質点力学要論」(昭和二四年一月)
- 「大宇宙の旅」(昭和二五年二月)
- 「カント・宇宙論」(昭和二七年四月)
- 「日本哲学史概説」(昭和二八年七月、昭和三五年二月)
- 「宇宙構造観」(昭和三七年五月)
- 「西洋占星術」(昭和三八年九月)
- 「西洋天文学史」(昭和四〇年四月)
- 「相対性原理概論」(昭和四四年三月)
- 「現代天文学事典」(昭和三二年五月、昭和四九年一月)
- 欧文(独、英、仏)論文一七篇 一九二四年 三七年
- Ueber das Erschaffen der Materie und das sich ausdehnende Universum (一九五三) Publ. Astron. Soc. Japan Vol.5)
- 自然科学の成立と方法について(一九五八、荒木俊馬博士還暦記念「現代の天文学」)
- 段階宇宙論と仏教の宇宙観(一九六〇、大谷大学研究年表)
- Der Mensch und der Kosmos(一九七四、京都産業大学論集)
- 宇宙探検開発の当今および今後の情勢と人類の福祉厚生(同論集)
- 「ニルニクスの研究歴と業績」(同論集)

京都産業大学『教学之源流』について

京都産業大学は、天文学者の京都大学名誉教授・荒木俊馬博士によって、創設された。昭和四〇年春、経済学部、理学部のふたつの学部にあわせて約七〇〇人の学生が入学して、産声をあげた。平成一七年春現在で、その両学部に加えて経営学部、法学部、外国語学部、文化学部、工学部の七学部、七研究科の大学院を置く総合大学になった。約一万三〇〇〇人の学生、院生が学び、卒業生はすでに一〇万人を超している。

この間、大学を取り巻く環境は、激変した。アメリカやヨーロッパの多くの国々に共通しているが、わが国でも大学の数と、学生数が増えた。進学率は速い速度で伸びた。そのために大学教育は、「少数のエリート育成」段階から「マス」段階へ、さらに学齢人口の半ばが入ってくる「ユニバーサル」段階へと変容しつつある。

だが、私たちの大学には、周囲の環境がどのように変わるうとも、決して変質することのない精神が、脈々として受け継がれている。それは「建学の心」である。

荒木先生が、なぜこの大学をつくったのか。先生は、どのような人材を育てようとしたのか。昭和四〇年(一九

六五)、大学紛争の嵐が吹き荒れた時代に「いまの大学に教育をまかせているのでは、わが国の未来はない」「自分の手によって、わが理想とする人材を育て、将来の日本を託す」という信念のもとに本学をつくった。その先生の心こそが、本学の教育の基盤である。まさにその心を受け継ぐ骨太の人材が、ここ神山の地から世界に巣立った。先生の醫咳に接し、建学の心を学んだひとびとである。

先生は、昭和五三年夏、総長として教学と経営の采配をとっている最中に、急逝した。

創設から亡くなるまでの一三年間、先生は入学式や卒業式で、学生たちに建学の心を語り続けた。本冊子には、入学式(第一回、第二回、第三回)、告辞と開学式挨拶、卒業式(第一回、第二回)、祝辞の六篇が収録されている。本冊子は、在学中の学生、院生、教職員すべてに配付されている。また同窓生にも読んでいただきたいと大学は念じている。そこに語られている先生の言葉をかみしめて、本学に学び、教え、つとめる意義を自ら掴んでほしいのである。

平成一七年(二〇〇五)春

学校法人 京都産業大学

編集について

荒木俊馬先生は、入学式の告辞や開学式挨拶、卒業式祝辞について、毛筆の草稿を残した。本冊子の本文は、その原文をほとんどそのまま収録している。変更を加えたのは次の点である。

(一) 新仮名遣いに統一したこと (二) 一部にルビを振ったこと (三) 扱(さて)、是(これ)や其(それ、その)など現在ではあまり遣われない漢字を平仮名に変えたこと、である。草稿集の表紙には『教学之源流』と先生の筆跡で記されている。第五回までの入学式告辞、開学式挨拶、第三回までの卒業式祝辞の計九篇が収められている。本冊子は頁数を絞る目的で一部を割愛した。

昭和四九年春に発刊、配付された冊子『京都産業大学 教学の精神』は、その草稿集を収録したものであった。今回は、題名を先生の付けられたものに戻し、あわせて最後部に「ことば」「社会と出来事」欄などを参考として記した。以上の点については、ご長子である荒木雄豪・本学名誉教授のご承諾を得たものである。

ルビ、新仮名遣いへの書き換え、および時代背景やことばの執筆と文責は、本学の荒木俊馬記念誌編集アドバイザー 永田孝である。「ことば」欄の説明は、広辞苑および英和中辞典(いずれも岩波書店)から引用したことを明記し、感謝申し上げます。出来事欄は『20世紀年表(毎日新聞社)および『年表昭和史』(岩波ブックレット)から引用した。

表紙タイトルなど、筆文字は全て荒木俊馬先生の自筆である。

京都産業大学 教学之源流

平成一六年(二〇〇四)四月一日 第一版一刷
平成二五年(二〇一三)四月一日 第一版十刷

発行

学校法人 京都産業大学
大学史編纂室

京都市北区上賀茂本山

TEL 〇七五―七〇五―一九九五

FAX 〇七五―七〇五―三二四六

印刷

大日本印刷株式会社

許可なく複製、引用を禁ず